

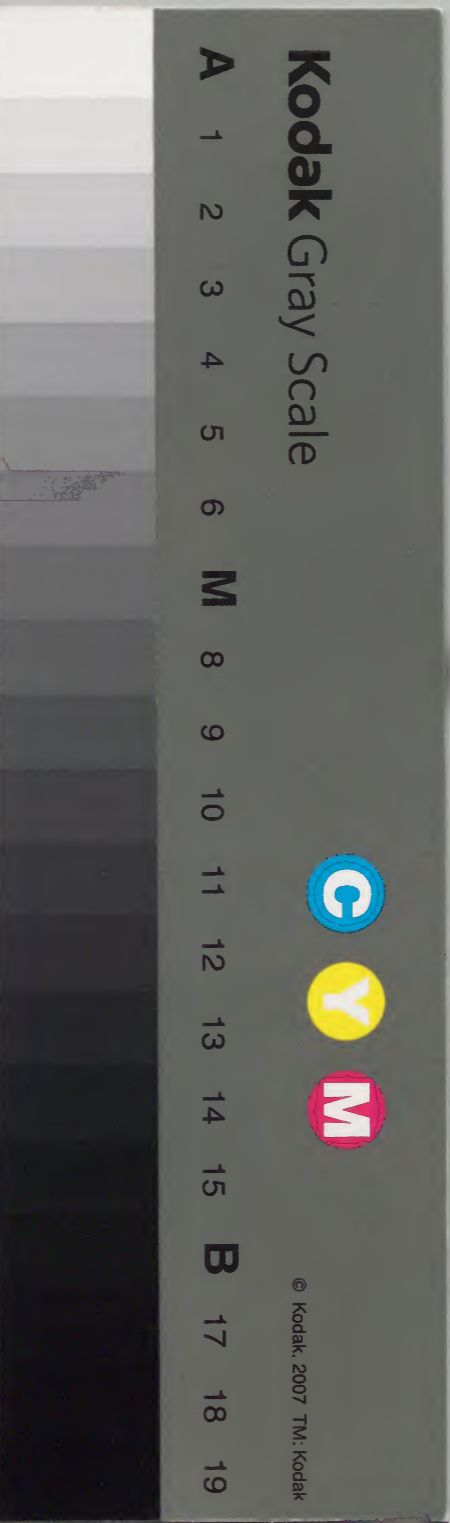
日本書紀傳 廿三卷五

和書
一〇五二二號

七丈

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156	(87)
函號	特 85	1

内閣文庫



清教
文庫部
印省

清教
文庫

清教
文庫部
印省

素戔嗚尊曰是神劍也吾何敢

一員小加奉り給ふ可き時ふる其時崇敬め侍有状古か立
復し給ふ可き時ふる其時崇敬め侍有状古か立
御改小おむ渡り給ふる其時崇敬め侍有状古か立
春小至りて朝廷の大神稜威世小振ひ起りて冬より此
坐て武臣小東荒夷を近著る事を甚く咎めさせ侍在
る大御命を下させ給ふる其時崇敬め侍有状古か立
夢今覚たる状も俄小武事を力めて縦ひ無き
艦を並べ来りて皆殺し小侍を力めて縦ひ無き
可く成れる者も一実も草薙神の大侍を頂き奉りぬ
小依れる者も一実も草薙神の大侍を頂き奉りぬ
坐思ゆる幽契の此も見れさ東国の方小鎮り侍在
の年遍ぬく有来る小見れさ東国の方小鎮り侍在
思て侍在妙あり妙
ある事ありり

日本書紀傳二十三

百七十八

私以安乎乃上獻於天神也然

後行覓將婚之處遂到出雲也

清地焉云素鵝乃言曰吾心清

清也此今呼於彼處建宮或

時武素戔鳴尊歌之曰夜句茂

多菟伊都毛夜霸餓岐菟磨語

昧爾夜霸餓積菟俱乃相與講

合而生兒大已貴神因勅之曰

吾兒宮首者即脚摩乳手摩乳

也故賜號於二神曰稻田宮主

神カミト

此ハ素戔嗚大神の尊き高き廣き厚き大神功の御程
 を見奉り清き明き正しき直き大神心の太較を見奉
 り知べき所カおむ有けるを古来の識者唯大凡小云
 ひ思へるカ甚轉カ有る事ありけれ今此大神の御為
 小明の盡し奉らずてハ得有まじくあむ所思えた
 る此段の一大事合せて三條有り一カ神劔奉天の御
 事カあり二カ嫡後の御定あり三カ吾心清く之の御言
 あり四カ建宮の御政あり五カ小謂ゆる八雲の神咏あ
 り六カ小生兒の御事あり七カ小宮首を任し給へる御趣
 あり右等カの大綱オホコソを舉がれて小目を載りカ故

△かりけれ右カ
 空を書れたる其意
 小打置かす直
 小天神の御許小速
 ぎて奉らせ給へる者

小此結文小已而素戔嗚尊遂就於根国兵之有を見て
 此大神の御大業ハ此小已小盡したりと思ふハ古書
 を熟讀む事の甚委りりさる者あり其已の委りり
 見る事能はずして此大神をカ荒振る思カし神の
 如く云成し奉りて其大神功御在し坐す御事を見出
 一奉りさるハ何たる罪人ぞや古書を學ぶハ似ず
 甚可畏く身も弥立て所思ゆる御事あり慎カむ可
 く又恐る一云此小素戔嗚尊曰是神劔也吾何敢私以
 可きかり安乎乃上献於天神也ハ已小上六丁小註るが如く此
 大神の天神お對ひて以りも私の御心御在し坐さる
 由を委曲小聞え上奉らせ給へる御事申すも更かの
 古事記小故取此大刀異物而白上於天照太御神也

かり第四一書小
 乃遣五世孫天之菅
 根神と有る五世孫
 の字小眼を著る
 故に此等の乃字
 を助字の如く去成
 て遙か時去りの後
 の事と思ふは甚
 う強説する者あり

見えたるハ然る大蛇の尾おど小斯る神々しき神物
 の自然小して有へき小本より非^ハハるが上小其大
 蛇の所居る上小常小奇^{カラクモ}雲氣の有ハ其神氣の秀小見
 られ出る小て中々小此国土の物おど正しく天上
 の御物と見定めさせ御在り坐て其大蛇を斬て尾中
 より得給へる由を申し劍を上りて私の御心御在り
 坐ざる状^ハを聞えさせ奉給へる御事お此第四一
 書小し尾中有一神劍素戔嗚尊曰此不可以吾私用也
 乃遣五世孫天之菅根神上奉於天と見え熱田縁起小
 し素戔嗚尊曰是神劍也何敢私祕藏乎献於天照大神

也とも有る此私字即字眼ふり上章第三一書小是後
 素戔嗚尊曰諸神逐我我今當永去如何不^下与我所相見
 而檀自徑去欵迺復扇天扇国上詣于天と有る檀字小
 對ひて此大神の清明き御心を發し申す御言ある事
 ハ申すも更ふの其終小且吾以清心所生兒等亦奉於
 姊と有る如く己小彼御生坐り男御子等を天照太神
 小奉りせ給へれば此小ても此神劍を天神の大御許
 小献りせ給ひ天神より其皇太子天忍穗耳尊小賜ひ
 て天璽と齋^ハ世奉りせ給へるむ小己尊の大御靈を
 も副て其天神御子を守護の奉りせ給ひむとの御結

△纂疏小何敢私以
安者至公無私也
意清之言也
于以蓋以神劍奉
日神者其意欲
傳之天孫而為白
王之璽也宣へ
る如くして

構小ころハ御在ー坐べき御事ふりけりー次ハ然後
行不見將婚之處云ーと有て速小根国小罷坐むと為さ
せ給ふ御急ぎも御在ー坐ざる御状あるハ天神の御
許りの留め進らせり（る由を）報（報）其御命小仰下されー御事
ふど小依りせ給はずハ如此しも擅ふる私の御行御
在ー坐ざる此大神の清き御行ハ打合ざれば其御
時の御有状小考ふ可き趣有る事上ハ十小己小云る
を併せ考ふ可くふむ有ける又第五一書小五世孫天
小依小此大神の四世を淤美豆奴神と申し五世を天
之冬衣神と申し六世ハ大国主神小當れりども其
淤美豆奴神と申すハ此素戔嗚尊小渡り給ひ又此
天之菅根神ハ神名秘抄小五十猛命天之冬衣神同神

△二十四卷三十六丁

と為るハ甚謂れ有る上小此正書の趣ハ素戔嗚尊の
御事大己貴神と見えたる是實小正説と見ゆれば古
事記ハ更ふり此一書共の傳ふも決めて誤有き事下
ニ百七丁ハ素戔嗚尊許と有れば然れハ此第三一書小
此劍皆在素戔嗚尊許と有れば久しく御許小置せ給
へるハ如くおれども彼記小故取此大刀思異物而白
上於天照太御神也と有を考ふ小異物と思ふ坐る
が故小打も置給はずして直小奉りて給へる者と見
ゆれば時去て後の事ハ非ずして此引續き小在
御事申すも更ふり古史ハ此を遙小後小根国小入
成されりも如何なりや例ハ二小然後行覓將婚之處
遂到於出雲国之清地焉ハ古事記小故是以其速須佐
之男命宮可造作之地求出雲国云ーと有る是小て此
宮ハ次小乃相與（クミド）違合而生兒大己貴神と見え又其第
一書小乃於奇御戸起而生兒と有る謂ゆる隱處

合同社生久志美氣濃
神社

の御事小して己小傳七二十丁小註せり八洲起元
章小二神降居彼島化八尋之殿又化豎天柱略中然後同
宮共住而生児と所見たる八尋之殿の御事を古事記
小ハ久美度逐興而生子と有る是ふの儲又上十四小
註るが如く此大神の天上小て己小娶し給へり
后神をバ大夜之女命と申奉りて即此第五一書小謂
ゆる五十猛命姑大屋姬命次杵津姬命三神の御祖神
小て渡り給へるを此御天降の御時小率て天降り
せ御在し坐ける御事ハ長寛勅文小后大夜女命山狭
村宮柱太知奉而静坐大御神三是也と見えたるを神

名式小出雲國意宇郡山狭神社と有る是あるを風土
記小ハ熊野大社夜麻佐社と相並べりも其本后神小
御在し坐せば處ハ隔たりても並記せる小其山狭神社
ハ大草郷熊野大社の東南山佐村と云小御在し坐て
今能義郡小属ゆと云れ即風土記小母理郡家東南と有る是也
國之可愛之川上小近き地と関ゆれば此時小相携へ
させ御在し坐て天降り給ひけむ事申すも更ある
小其川上ある長江山を磐船山とも云て天降の古
迹と思しき小仁多郡鳥山上其山續アハ小て合遠
りざるを神名式小同郡伊我多氣神社杵築社記小五

十猛命曰伊我多氣大明神と云ふを在^抄横田郷竹崎村
鳥上^山落麓西北云れバ此神の落著せ給ひ一處之所思
ゆる小一名船通山と有云由あるを思合せて其山
狭神の御母子四神共小此度同ト出雲国小天降り
坐し御事を知べし然る小神名式小意宇郡熊野坐神
社^名前^{サキ}神社と相並バせる前字を佐伎と訓るハ后
神と申奉る御事ト謂ゆる嫡后の謂あるが其后神
ハ誰カ坐む此奇稲田姫命小御在し坐べき御事申す
も更ふるも已小本后神の御在し坐す上小今如此し
も嫡后神を娶らせ給へるハ如何ありける御事かと

云小本后神を娶らせ給ひてハ彼三神を令生給ひて
上天の樹種を將下させ御在し坐て天下を青山と成
させ給ひむ御為ふの此小於て天下悉く青山と成て
大山祇神の御徳真盛小成以て来小たるを此小其御
孫と御在し坐す奇稲田姫命を嫡后と為させ給へる
ハ其御児大己貴命を令生給ひて此天下を經營しめ
給ひむ御心小御在し坐すハ然る物ふて此大地の全
体ハしも摠て海と山との二のふ内偕其海神ハ傳
八^{八十}十三百五小云るが如く此大神の荒魂小御在
五^十十六丁小坐るを此小山神の御女を娶らせ給ふ小至りてハ

海陸を合せて相有たせ御在坐る謂て即神父大
 神より可以治滄海原潮之八百重也と云る御事依の
 御旨此小至りて調はせ給ふ御政あるかて甚々妙小
 奇しき趣有る御事ふむ御在坐渡らせ給へり
 ける此等己が心任せの事を云が如くあれども然
 渡らせ給へり古事記大宜津比賣神の御身より種
 種と有る此小の神出是神産巢日御祖命令取茲成
 保食神の御事傳あるを此を以て其神の御女大夜
 之命の御事大神の后神と定よらせ御在坐て且御
 子神等の本種を殖生し給ふ神小渡らせ給へり所
 を思ふ可き者かゆ又同記小大神の娶大山津見神
 之女各神大市比賣生子大年神次宇迦之御魂神と見
 えたる此小奇稲田姫命の御姑小坐を此小依て農作
 神を令生給へるを以て大山祇神の御女を娶給へ

る由有る御事小て此大地の全体小係る所由有る
 者と所見たる是かゆ又上十下小説る奇稲田姫
 命と申す小も御田の事小由有て関ゆ三小乃言曰吾
 白をも思合さば思半小過あむりし
 心清清之此今呼此と云るハ古事記小尔到坐須賀地
 而詔之吾未此地我御心須賀く斯而其地作坐宮坐
 於今云須賀也と所見たる是あるか此ハ唯何の事も
 無く御心の清くしく成らせさせ給へり小就て此御
 言を宣へるが如く思しき物り然る並この御事小
 てハ御在坐トウ其も又上十三小註るか如く出
 雲風土記小神須佐乃烏命天壁立廻坐之尔時来坐此
 處而詔吾御心者安平成詔故云安来とと所見也た

其ハ此度安藝国可愛之川上小御在坐著せさせ給へり御時の御事あるかて其再上らせ御在坐高天原小して天照太神の大御許して其清明き御心小御在坐す由を明らめ奉らせ給ひ其小就てハ先小清明き御心を以て誓小生成し奉らせ給へる男御子等を天上小奉らせ給ひ日神の御子として天降し給ひ天下を所知食しめ奉らせ給ひむ御事を契聞えさせ給ひ又其御返さひ小日神の御生坐し三女神を賜ハのて其御所置共を受賜ハらせさせ給へる小彼天壁立極を天翔の行廻らせ御在坐つても此安

未郷小天降の著せ給ひて御心安く御在坐す由小詔給へる御言ある御事ハ申すも更ふの可愛と云ふ地名を其意を含み成れる者ところハ閑えたりけれ若て此小吾御心清く之と詔給へるハ右第一條小註るが如く是神劔也吾何敢以安乎乃上献於天神也といふ云ハ至公小して私心の御在坐す謂あるを己小其天神小奉らせ給へる男御子ハ其神劔を以て天璽として授給へるむ御心を含みて奉らせ給へるあれバ其と申すも其男御子を最愛しかりせさせ給へる御所行小渡らせ給へる者ハ此時其上天小奉る

せ給へる御使の歸來れりや未歸らずや見る所無し
と雖も此大神の御上小取て然御心の任小治奉る
せ給へる小就てころ清く思わし成りせ給ふ可
き御事ある者あけれ心元此時の素戔嗚大神の御
し給へると其天神御子を天照大神を仲き敬ひ奉
御為と此二事小依て顯国小御功を立させ給へる御
事あるハ右小吾何私以安予と御言ハ更あり此第五
一書小吾兒所御之國と有る御言ハ皇御孫尊の所知
食す御食津国の御事ある例此小准りて大神の
允すの御事共を見渡す小実ハ然のこる見えたりけ
る四小乃言曰吾御心清く之於彼處建官と有ハ此地
小至りせ御在し坐て御心の清く成りせ給へる
を以て此時小所思わし定めさせ給ふ所有て終小其

宮室を營ふおせ給ふ御心おむ定まらせさせ御在し
坐けるある然るハ上章第三一書日神小辞見下の御事
を申奉らせ給へり所小今則奉觀已訖當隨衆神之
意自此永歸根国云々已而復還降焉と有る上ハ本よ
り此顯国小御身を留めさせ給ふ可き小御在し坐さ
る筈ある小御妻問の御事おどい申すも更あり如此
く宮室を建させ御在し坐と云事已小上ハ下小云る
が如く実小天神より殊ある詔勅ミコトノリを仰せ進らせらる
るおどの御事小依らずハ此擅ふる私ハ御心御在し
坐ざる大神の御上小御在し坐べしも非る御事お

を思ふ小此吾御心清之之と詔へる御言ふ小必然
幽深き致ふ御在り坐つ可き事ありける若て此
建宮の御政ハ此第二條小謂ゆる嫡后の御為小奇御
戸を建させ給へり御事ある物り彼二柱御祖神
の八尋之殿小同宮共住給ひて大八洲国を生給ひ又
萬国を建させ給へる小等しくして此須賀宮小御在
り坐て彼滄海原潮之八百重を所治して此天下国土
を所知造り給ひむの御事小渡らせ給へる者と
ころハ想像の奉り事ありけれ然るハ傳二十二
十百丁小引る上章第三一書小吾以清心所生兒等本

奉於御と有ハ御父母ニ神より受賜ハらせ給へる此
天下を天照太神の大御命以て皇御孫尊カ事依り授賜ハらせ御
事を委任せ奉らせ給へるを此時小宮を建て此
小留在于せ御在り坐すハ未天地開闢て後遠くも有
ざる事ありければ世ハ実小草昧小して更小天神御
子を天降り奉らせ給ふとも容易く治めさせ給ふ事
信小難在ぬ可き御事小御在り坐せハ是を以て二柱
御祖神の御功業を継奉らせ給ひて此国土を造成し
固めさせ給ひむの御事あるハ其證第五一書小
韓卿之島是有金銀若使吾兒所御之國不有浮宝者未

是佳也。有ハ更ふり又下二百小説べき出雲風土
 記小次大神を因引坐八束水臣津野命と有て此滄海
 原潮之八百重小在と有ゆ。天下萬国カチキリを裁度て各
 國成し給へる御功の御事ハ二柱御祖神小繼て尊き
 御功小坐を其御功を立給へる御時ハ何れの時ハ
 御在し坐む此建宮の御後ある可き事云も更あ者
 小ゆり下二百九引る欽明天皇十六年御紀百濟國赤仲下ナレ御言小原史建邦神天地割
 判之代草木言語之時自天降来造立国家之神也。見
 元たる建邦神と申すを鈴屋大人説小次大神小御在
 坐ふる由小云れたるハ然る言ハ以萬國の皆も必

△此人皇氏と申す
 ハ師説小天地二皇ハ
 伊邪那伊邪那
 美二神小御在
 坐を其二神を枕
 中書小元始天皇
 太元聖母の間小生
 坐ると云る其高
 皇産靈神皇産
 靈二神小渡りせ
 給へる其天地二
 皇の子と有れば
 決く健速須佐之
 男余小坐り

此小就て師平田氏赤縣太古傳小三皇記と云を立りれ
 洛書靈准聽春秋命歷序などの文を取合せて人皇
 氏九頭九男相像其身九章故曰九皇兼雲祇車駕六提
 羽而出谷口分九河依山川土地之勢裁度為九州謂之
 九國因是區別各居其一故曰居方氏人皇乃居中州以
 制八輔此各州之始也。書されたるハ實小受たき事
 共ふり其九頭九男と云。氏地二皇小十二頭と云る
 小居給ふとあり出谷口命歷序の本注小又曰人皇
 小出賜谷と有れば杖桑域内あり賜谷の地より出
 谷谷名あり由春杖桑域内あり賜谷の地より出
 九河八洲起元章小處ニ小島皆潮沫凝成者矣亦曰
 水沫凝而成也。有謂ゆ蛭兒淡洲ふる由己小傳
 六卷百五十四丁七卷八十二丁八卷六十七丁小注
 が如し故思ふ小其始處ニ小島と云状ありけるを進
 次がひて潮沫水沫の凝聚りて一小成れり其山川
 土地の勢小因て九河を分ちて大九州とハ為給
 へる云ふ也。九州の地を截て其間小海を隔給
 言右赤縣之州是為中則東南神州曰晨土正南迎州曰

△右の建邦神を

沃土西南戎州曰滔土正西并州曰并土正中冀州曰中
土西北柱州曰肥土正北玄州曰成土東北咸州曰隱土
正東揚州曰申土有是是即此大地万国を九圍
小分たせ給へる称ふる事太古傳ふ委し各居其一曰
居方氏ハ上ハ謂ゆハ九頭ハの分身各其一州小居在し
坐ハ故ハ小居方氏ハとい申せる由あり人皇乃居申州と
ハ皇国ハ右ハ謂ゆハ正東揚州ハて此申土の事あり
ハ此地ハ清宮ハ小居在し坐ハて八輔ハの分身を御し給
ふ御事ハ小居在し坐ハせども右ハ彼赤縣州ハての傳ふ
見ハ故ハ小已ハを中州ハと中土ハと為る傳ふれ其心ハて
見べし然れハ鈴屋大人ハの此大神ハの御事 五云謂ゆ
ありと云れたる先見実ハ小仰ぎ恐る可し
る八雲ハの神詠あり出雲風土記ハ所以ハ舞出雲者八東
水臣津野命詔ハ雲立語之故云ハ雲立出雲と見えた
る是あり抑此歌と云事の世小已ハ有初けるハ八洲
起元章ハ謂ゆる唱和の御詞是よて其第二一書小陽

神先唱曰妍哉可愛少女歎陰神後和之曰妍哉可愛少
男歎と有ハ如ハ古今集序ハ此歌天地の開け初より
けり時より出来小けりと有て本注ハ天浮橋の下小
て婦メガミ神夫神ヲガミと成給へる事を云る歌ありと見え續古
今集真名序ハ夫天地之二儀共成一物化神雌雄之
兩元相違八洲分殊然後有和歌と有る專右の唱和の
御詞を指て歌と云ふの傳六四十小註せるを見ん
きあり次ハ宝鏡開始章ハ天鈿女命則手持テ茅纏
之ハ弱立於天石屋窓戸之前巧作俳優と有る此事をバ
古語拾遺ハ巧作俳優相与歌舞云々伸手歌舞相与稱

曰阿波礼阿那於茂志呂阿那多能志阿那佐夜憇飯憇
と書し又波年中行事秘抄に謂ゆる鎮魂歌の一二三
四五ヨイユナヤコリヤ六七八九十と有る拾遺に凡鎮魂之儀者天鈿女
命遺跡と見えなれば已に其時の神詠たる可き事傳
十九三百五十三丁の委しく註せるが如し古今集序
小千早振る神代に歌の文字も定まらず素朴スナホの十
て言の意別難りゆけしと有る右等の歌共の事を
然書されたる者ふり次ふ此素戔嗚大神の八雲立
の御語是あり同序に然有れども世に傳ふる事久
方の天ふしてい云荒金の地ふしてい素戔嗚尊よ

りぞ起りける云人せと成て素戔嗚尊よりぞ三十
字余り一字に詠ける素戔嗚尊は天照太神の兄あり
造り給ふ時八雲の立を見て詠給へるあり八
雲立つ出雲八重垣妻隱め八重垣作る其八重垣を
と見え其真名序に然而神世七代時質人淳情欲無分
倭歌未作遠于素戔嗚尊到出雲国始有三十
反歌之作也其後雖天神之孫海童之女莫不歌通精者如く世に傳ふる三十
一字の歌はし此大神の御言に出て語天地に合ひ
感神人を貫きて神祇の御情状をも見奉る可く人世
の思慮をも盡し極む可く妙小奇しき物おも出未れ
りけるは実小此大神の御恩賜ふおも有ける但右の

反歌を一本小變歌小作る、誤かり反歌ハ美自加字
 多と訓べ、万葉集の例短歌と反歌と相通、て書
 る是かり次小天神之孫海童之女云々の事ハ天孫降
 臨章第六一書小皇孫因幸豐吾田津姬則一夜而有身
 皇孫疑之云、然豐吾田津姬恨皇孫不与共言皇孫憂
 之乃為歌之曰憶企都茂播沖藻陛下播譽邊疾耐雖寄世佐祢耐深床據
 茂阿黨播怒不今茂譽播磨都智耐理譽千鳥又海宮遊行章第
 七一書小彦火、出見尊云、海神則以其子豐玉姬妻
 之彦火、出見尊還御云、豐玉姬云、乃涉海徑去于
 時彦火、出見尊乃歌之曰飲企都劉利澳軒茂豆句志磨鳥鴨著島

尔戒和我謂祢志伊茂播不和素邏珥世譽能據鄧馭鄧世盡又是
 後豐玉姬聞其兒端正云、奉報歌曰阿軒娜赤磨逆五此訶
 利播阿利登有比鄧播伊珥耐雖企弭我譽贈裝束比志多輔尊姑句
 阿利計利有と有あぞ神代已小如次く歌詠有けるも此
 大神の神詠より起りて上天ハ更おの海宮小至る迄
 小至又べり、かの況て人世ハ傳へて世小弘く行
 ふ、れぬ可き事あり、土佐日記ハ昔阿部仲麻呂
 て及来る時小船乗る可き所、ふて彼國人餓別、別れ
 を惜、て彼処の持作あど、ける飽ずや有けむ、二
 十日の夜の月出る迄ぞ有ける其月ハ海より出け
 る此を見て仲麻呂の主我国ハ斯る歌をあむ神代
 より神も詠給ひ今ハ上中下の人も箇様小別れを惜
 り悦びも有り悲、しも有る時小ハ詠心とて詠り

△と持齋きて

ける歌云々彼国人関知る事... 意を此の男文字小様を書出して... 小云知了せけれバ心をや関得たり... 起れる事を云ふ内借世の人如何... 此大神ハ如右ノ歌と云物の遠祖... 其神ハ心得益荒雄の益荒雄と有... 出と云ハ本より此大神の心を... 言ハバ今云小も足ざれども有... 状をふむ思ハ可六ハ乃相與... 成り奉りせ給へるハ天神御子... 給ひて此天下万国を所知坐し...

御設共御在り坐る御事ハ已ハ傳二十二... 十九丁二小注... 爾ガ如ク然る小此小根国小御在り... 清宮小留まらセ給ひ其嫡后奇稻田姫命... 如何ふりける由らと云小此大神ハ... 国土を經營しせ給ハむ御心と所思... 給ひて其其御功業共を勤めさせ給ふ... 小ハ彼国小御在り坐べき大神身小渡... 小其御功業を受継て此国土を經營... 天神御子小安国と平けく所知坐し... 御為ふり然るハ此時の国土の状ハ...

根国小羅_レせ給ひ伊弉諾尊_ハ上天小復命_一給へる
か上小此大神の根国小御在_一坐ぬ_レれば此天下国
土小主宰と云物無れば荒振神所を得て荒びぬ可き
ハ然る物_ハ何時の_代如何なる時を待て。皇御孫
尊の所知_レ看べき時_一有むと御子大己貴命を
て己尊の御功業を令継給ふとあり此_ハ因て其御子
の生出させ給へる後_ハ其御祖神小属けて己尊_ハ放
れさせ御在_一坐て種_ハ小辛苦ふめ進_レせ給ひ其
御勢力の強盛小御在_一坐て此大神の御稜威_ハ小
るせ給ふ_レ成_レせ給ひ_ハ御有様を試_レ給ひて

終小根国小入御在_一坐むとあり然る_ハ小其大己貴神
の御事を_一書小_ハ此大神の御子清之湯山主三
名狹漏彦八島野神御在_一坐て此神五世孫即大国主
神と有り_一書小_ハ然後素戔嗚尊云_レ所生兒之
六世孫是曰大己貴命と見え古事記_ハ本よりの六世孫
小御在_一坐る傳ありと雖も此正書を以て正_レき傳
と定む可き事_一又傳二十四卷小委_レ論つ
る_ハ註せるが如_一偕其大神の御子を甚く辛苦めさ
せ給へる事ハ古事記小故此大国主神之兄弟八十神
坐然皆国者避_レ於大国主神所以避者云_レと有て其ハ

十神の為小被殺給へる事有り其下尔其御祖命哭惠而参
上于天請神産巢日之命云々有り次小其八十神の
為小冰目矢を以て打殺され給へる尔亦其御祖命哭
乍求者得見即拆其水而取出活告其子云云乃速
遣於木国之大屋毘古神之御所尔八十神竟追臻而矢
刺之時自木俣漏逃而去御祖命告子云可参向須佐之
男命所坐之根堅洲国必其大神議也と有る根堅洲国
の事論有る事あるは是大神と后神と處を別カ
て御在り坐ける證ふり又御祖奇稻田姬命と御子大
己貴命と二柱共小同處小御在り坐ける論ふり若て

大己貴命其御父大神の御所小御在り坐ける所小其
女須勢理毘賣出見為目合而相婚還入白其父言甚屬
神未尔其大神出見而告此者謂之葦原色許男即喚入
而令寢其蛇室云々亦未日夜者入吳公与蜂室云々亦
鳴鏑射入大野之中令採其矢云々尔持其矢以奉之時
寧入家而喚入八田間大室云々と有て其御容を受奉
りせ給ひて其事小堪させ給へる時小遥望呼謂大穴
牟遲神曰其汝所持之生大刀生弓矢以而汝度兄弟者
追伏坂之御尾亦追撓河之瀬而意礼為大国主神亦為
宇都志国玉神而我之女須世理毘賣為嫡妻而於宇迦

能山之山本於底津石根宮柱布力斯理於高天原冰椽
多迦斯理而居是奴也ト有ハ其大已貴神の長トありを
見行ハ一御在ハ坐テ其大國主神ト申す御徳を授傳
へさせ給へる御政ホテ此素戔嗚大神の御盛業ハ美
事此小過たるハ有ハ心ハト事ハ心ハ坐ける右小引
根堅洲國ト有ハ論有リト云ハ全ク其御所ノ事ヲ云
ハ乃速遣於木國之大屋毘古神之御所ト有ハ續ける
ガ如ク神名式ハ傳ニ十二卷二百九十五下小己ハ注
月次相嘗新嘗ト有ハ此地ノ事ト聞ゆレバ其素戔嗚
大神ノ御在ハ坐ハ同ノ事ト傳三社各神大月次
新嘗ト有ハ然レバ其下支ハ故爾追至黃泉比良坂ト
有ハ右ノ根堅洲國ヨリ引レタル文ホテ疑ハハキ事

共あり次々辨へて七小其宮首を任し賜へる御政ホ
むを考合す可し七小其宮首を任し賜へる御政ホ
り因勅之曰吾兒宮首者即脚摩乳手摩乳也故賜号於
二神曰稲田宮主神ト見えたる此事古事記ホモ於是
喚其足名稚神言汝者任我宮之首且負名号稲田宮主
須賀之八耳神ト有り吾兒宮トハ其後神奇稲田姫命
ト兒神大已貴神トを棲セ參ルセリて已尊ハ何レ
小ハ物為させ給ハむとの御結構御在ハ坐けハ故
小其足摩乳手摩乳神を任して其御兒大已貴神の傳
ト成ハ進ルセリれたるあり然るハ一柱ハ女神小坐
一柱ハ兒神小御在ハ坐ガ故小萬を右ノ二神小委

任奉させ給へる御事あり纂疏小宮首猶後世六宮之
職也と註させ給へれども猶後世の東宮傳ふて六
宮職を兼たるが如く小ころい有けり東宮職員令
小傳一人掌以道德輔導東宮と見え又東宮坊大夫一
人掌吐納啓令宮人名帳考叙宿直事と有る是ふり其
六宮職と云い職員令義解小中宮職謂皇后宮其太皇
太后皇太后宮亦
自中大夫一人掌吐納啓令謂納啓於上
宮也事と有る右等
の職掌を併せ兼たるが如くして其見神を傳き奉り
其清宮の万歳を執行給へる事右小稻田宮主神と御
名小負せ給へるを以て曉る可き者あり凡て官を置

せ給ふ初ハ四神出生章第十一、一書ハ又因定天邑君
と見えたる是人世小至りて国造縣主を任し賜へる
事の起ふり又古語拾遺天石窟段ハ令大宮賣神侍於
御前豊磐間戸命櫛磐間戸命二神守衛殿門と書され所見た
る是内官を被置たる事の初て物小所見たる始ある
由傳十九五百二
十三丁二十二三百
十丁小己小注るが如しと雖
も其ハ天宮の御事ふり此ハ素戔嗚大神の清宮を右
の二神小委任ぬて唯小其傳と成し給へるが如しと
雖小却小此一事ハ止まる可らざる御事ふり其
大神の此清宮を本宮として又處々の行宮小御在し

坐つても此大八洲国ハ申すも更ふり大地万国の全
を統御し看させ給へる小ハ許多の官ニの神等を任
して各其職を以て令仕奉給へる者と亦む所見たり
ける然れハ右の清宮にハ此大神の根国ハ蘇り御
在り坐すての本宮たるのふらず其御子大国主神
の天下を主領き御在り坐ける宮所ある事ハ本より
知りれ又其大神ハ從奉りれハ官ハの神等ハ皆此大
国主神ハ從奉りるハ所由此ハ在る事ありけりハ
素戔嗚大神の根国ハ入り給へる迄ハ猶大山津
見神の御女神大市比賣命ハ娶給ひて御子神等を令
業を立させ給へり御事ハ御在り坐すを其ハ此下

△又古語拾遺ハ
靈劔と作る

△其上文ハ故切其
中尾時御刀之ハ
毀ハ思怪以御刀
之前刺割而見
者在部牟莉之
大刀之有ハ思怪
の言ハ對ハたる
者ハ

二百九十九丁より以下ハ
云べけれハ就て見る可ハ○素戔嗚尊曰是神劔也ハ
第三一書ハ別有一劔と見え第四一書ハ尾中有一神
劔と有ハ是あり訓来れる任ハ右等ハ神劔一劔共ハ
同ハハ阿夜志伎都留岐と訓べハ古事記ハ故取此
大刀思異物而ハ有公珠ハ委ハき傳あり偕此神劔を
得て神ハ異ハき物と所思ハける所由ハ此時の素戔嗚大
神の御心を想像り奉り小蛇尾より斯ハ神劔の出た
事本より怪ハきハ又常ハ其劔を有てハ蛇大の上ハ
常ハ雲氣ムラクモの立覆へる是其怪ハませ給ハ第二亦又
其神劔の神氣御在り坐て甚神ハハ有て此国土の

△阿夜と指敷
程の

有ふらず正しく天神の神物ある事を見定させ御在
し坐て然る小ても如何小して此神劔の大蛇の有
と成れりけむと怪しませ給ふ是第三あり次小は
乃上献於天神也と有を以て見奉る可し此神字を阿
夜志伎と訓る例は此第六一書ふ于時神光照海忽然
有浮来者神武天皇戊午年御紀小乃運神策於沖衿崇
神天皇七年御紀小蓋命神龜以極致災之所由也雄略
天皇御紀小天皇産而神光満殿と見元又万葉一二十
小圖負留神龜毛也有是是なり凡て阿夜志と云ふ
言ハしも傳立其見たり固たりする物の有ふ小十小云るが如く甚案外ある事也見

有其所以不審り也詞語あり丹後風土記小国生大神伊射奈
藝命天為通行而梯作立故云天梯立神御寢坐間仆伏
仍怪久志備坐と見え天孫降臨章第五一書小亦欲明
汝有靈異之威クモニアヤシキ子等復有超倫之氣ふと有て久志備と
相並ぶ語ある者あり万葉三十四小如阿真貴久奇母
神左備居賀又二十言不得各不知靈母座神香阿又三
九海若者靈寸物香七丁十惟殊欲服此暮可阿又三十
惟毛吾神者于時無香九丁十八小家見跡宅毛見金手里
見跡里毛見金手惟常所許尔念久十一丁六惟者戀相
依無又二十辰尔波成不相毛怪十二丁六小名者告而

之乎不相毛恠十八十五丁小安夜思苦毛奈氣伎和多流
 香ふじ見え靈異記小奇字を米豆良志久又阿也志之
 訓又奇字を御紀小多く阿夜斯と訓るを又久頃
志とも訓べき字ふり其言の意ハ傳ハ卷十
丁靈異の下小委しく云を見べきふり又右の恠字
を崇神天皇十年御紀小斯流麻自と訓り測知られぬ
習小出たる言あるふこる字書小非常曰 ○吾何敢私
奇と云ひ兒状怪奇不常曰怪と有り
 以安乎ハ才四一書小此不可以吾私用也と書され縁
 起小も何敢私秘藏乎と有て兆私字実小眼目と有る
 所小て此大神の至么ある大御意を見奉る可き要文
 あり然るハ傳二十二三百小委しく云るが如く上章
 第三一書小是後素戔鳴尊曰諸神逐我我今當永去如

何不_下与我姉相見而擅自徑去歟迺復扇天扇国上指于
 天と有る擅字と相並びて惣ての御事共小天照大神
 の大御意を御心と為させ給ひて露也ハシキツ已尊の自由ふ
 る私の御行ひの御在り坐ずして此小吾心清く之の
 御言小究ハ一給へるが如く実小清き明き正しき直
 き御志操ミコトノの御程感け奉る小も餘有る御事小ふむ御
 在り坐ける然れば此小大蛇の尾中より神劔を得させ
 せ給へるハ已小天照大神小辞見ハカリマラシの御事を聞えさせ
 御在り坐て根国小甕御在り坐むとて天上より天降
 り御在り坐る後の御事ふれば奏天させ給はずと有

ぬ可き御事あるを甚如^くも所思^はける、已^し其
男^を御子^ををさへ奉^りせ給^ひて萬の御事共^に天照太
神の御所置^し從奉^りせ給^ひむと^もあむ御在^し坐^す
ける纂疏^小何敢私以安者至^し無我也吾心清^く之言
出^す予^に此蓋^し以^て神^を奉^り日神者其意欲^し傳^ふ之^を天孫^を而為^す
白^く王之^を國^をと有^り實^に私^に公^の字^の對^{する}事^を誰^も知^れ
相^れたる^を御^に説^く共^にあり^し私^に公^の字^の對^{する}事^を誰^も知^れ
ある^が如^く例^の天孫^の降臨^の章^の才^に一書^の小^は是^れ後^に神^を吾^が田^鹿
葦津^の姫^を見^し皇^の孫^の曰^く妾^の孕^み天^の孫^の之^の子^を不^可私^に以^て生^じ也^を其^の才^に
一書^の小^は故^に吾^が田^鹿葦津^の姫^を抱^き子^を而^し未^だ進^ま曰^く天^の神^の之^の子^を寧^ん
可以^し私^に養^ふ乎^を故^に告^げ状^を知^り関^しと有^りを古^の事^を記^す小^は故^に是^れ以後^に
木^の花^の之^の佐^を久^く夜^を昆^を賣^り參^り出^し白^く妾^の妊^み身^を今^に臨^み産^む時^は是^れ天^の神^の之^の

御子私不可産故請と有る私に密其事を表立て公小
申させ給へる時の語あり神功皇后御紀小令三軍曰
云ニ貪財多欲懐私内顧必為敵所虜と有る懐私公
事を忘るるを云ふり續紀才十六詔小大宮乎将圍止
云而私兵備止関音而と有る官軍の公ふり小對へて
私と云ふり才二十五詔小朕私父母波良何良尔至
麻豆可在状任止上賜比治賜云ニ伊何尔恐久私父
母兄才尔及事得甚恐自進母不知退母不知止伊奈
備奏と有る淡路天皇の大御位小即せさせ御在し坐
て聖武天皇太皇太后太上天皇を御父母と頂き給ふ

△又私心閑々小器出
給ふ云々帯水如何
私心主と云々思ひて
侍めるを神の殿上人
共も私の別情も多
り澳磨小位と云々
奉り侍る小私心
小云々又侍る親
う仕奉る浪御供
奉り可き心儲けて私
の別情も程々人目
も無一又内侍の
御許小倒の中納言の居
の私事のやう云々
明石小入道は彼國
の得意な年頃相
詰ひ侍つれど私
少相恨る事侍りて
少女小此の御私事
小内侍の事不れ敷
多ふも流れず成小
心玉鬘小唯某家
私君て思申して頂
小お捧げ奉る可
初者小私の祈り何許
の事をりて御聞ゆ
序小奉りて物言試
一から私の後身有
一と宣ひて野か小宰相の君内侍ふとの氣ひ為れ私事と忍や小給ひ行幸小公の事繁小私の志の原をぬり若菜上
私さまの御後見無き口惜げあること心我の殿と思す二條院にて御宿い若せ給小若菜下世中東ふし思ふこと心易し思
人小も對面一私さまの心を造りて聞らし過す小私さまの程と物進す小私の顔言小繁ま巴ト衣を盡一云々
本小神事ふとの繁盛と云々私心は仕せて隠り居たりと云々又宮仕の程と物進す小私の顔言小繁ま巴ト衣を盡一云々
御法小年頃私御
小て書せ奉給ける
法華經云々竹川小
辨官に況て私の官
急ぬ可き仕然れ
やと思し給むと申
給ふ又私思ふ事叶
ぬ歎きの云々橋
△然れば此の例
縁起の杖藏手を
し乎佐赤加米夜
丑登詔給比氏と訓
つ可き者あり
姫小即別れ侍り
と私事小飽す哀
うふむ稚本小皆私
の君小心寄せ奉り
給ふ慈南小公小私
小し御暇の由申給
て寄生小宮の御私
事小云々又其程
の事小私事のやう
あり有ける東屋の
私の居の如く思傳
き奉りて叔彼宮の
御前小其人氣無
く見えず小多思
けてけれ私事小

小對へて詔給ふふり云れたるか如く其御本生の
御親族を指て私と宣給へるかり又其才五十四詔小
其高御座天之日嗣座波非吾一人之私座止奈所思行
須と有る天下の公なる小對へて私座と宣給へるふ
此又田公試令諸国公田義解小謂公田者衆田也云ひ
又公私田義解小謂位田賜田及口分田墾田等類是為私
田自餘者皆為公田也と有る公私の對も本より右の
例ふる事云も更ふり又源氏の卷卷公私同と云
り又桐壺卷此君を私物思傳給事限無此の我鐘鐘
同ト各義抄小私字を和多久志又年古又比曾加久
知比佐志又年都麻自又阿比年古又加多麻志又加久

流ふど判りの言義、我方未と云事小て物を我方小
寄る小出たるある可一方を多と云事、彼方此方の
例有る。○以安予の官本新宮本共小旧訓於祁良牟夜
是あり。○以安予の官本新宮本共小旧訓於祁良牟夜
登詔給比氏と訓り即將置有予の義あり古詔拾遺神
武天皇段小其物既備天富命樂者齋部捧持天璽鏡劍
奉安正殿并懸瓊玉陳其幣物云くと見えたる奉安を
も此の如く小て奉置と訓べき習ふる是あり但此の
以安を於祁良牟と訓て、此神劍小就て、無礼き云
様ありと雖も此時小大蛇の尾中より出たりと云の
こ小て未天神と御物ふりと云事を詳ふらざりけれ
ハ此時ハ已尊の私の神宝ふり然ればこら大神の御

思傳のまゝを又
 憤り私心の添
 たるも苦一りり
 浮舟の年改りて何
 事の侍一少許私
 一如何の楽なき悦
 多く侍らむ又私罪
 も其て減り結
 又私訪い小可
 人の許小指で来る
 ありと云ふ私の人
 や艶ふる文を指
 取する踏給小私
 許志も中深さ勝
 許あむ手習小左
 許門い私私りたる
 人小養應ふと云ふ
 と有を思直して知
 べ

言小ハ麻都流と云ふ崇辞を添て宣給いざるありけ
 一此以安ハ出雲風土記意字郡母理御條小所造天
 下大神大穴持命中但八雲立出雲国者我静坐國青垣
 山廻賜而王珍置賜而守詔故云文理神龜三年改字母理と有る
 置小同トき事本より便あり又傳十九五百六小注せる十四丁
 如く古小神小奠る物小唯置との云けりハ彼千座
 置戸ハ更ふり幣帛小置と云事古言の常ふれハ麻都
 流の言ハ添すと何りハ苦一りりぬ可き其上古事
 記日代宮段小以其御力之州那藝草劍置其美夜受比賣
 之許而取伊服岐能山之神幸行略中此時御病甚急尔御

歌曰哀少女登賣能登許能辨尔和賀我淤岐斯都流能多知。
 曾能多知波夜歌竟即前と有て文小置と有り御歌
 小ハ淤岐斯と詠せさせ給へり此事縁起小ハ其後語
 宮酢姫曰我及京華必迎汝身即解劍授曰宝持此劍為
 我床守時近習之人大伴建日臣諫曰此不可留何者承
 割前程氣吹山有暴惡神若非劍氣何除毒害倭武尊高
 言曰縱有彼暴神拳足蹴殺遂留劍上道到氣吹山云
 既而遇鈴鹿山病痛危迫故歌曰云々而已倭武尊奄然
 遷化之後宮酢姫不違平日之約獨守御床安置神劍と
 有此安置字も其御歌小淤岐斯と有小依て然訓べ
き事云も更ふり安字ハ各義抄小夜須志とも於

久しと那牟叙と登豆とと伎昆志とと阿都志とと志豆加奈利と伊豆久叙とと佐陀牟とと於佐布とと訓れ此の以安字を於初良牟夜と訓て允の當れる者ありら字の亦安置と熟する事人の知れるが如○天神の古語拾遺も然り才四一書の上奉於天と有の其高天原を云て天神の御事を略れたり一者あり古事記の白上於天照太御神也と見え縁起の献於天照太神也と有る是より借惣て常の天神と申す時允て天上の御在り坐す限の諸神の稱ある事此大地の在ゆる衆神を国神と云ふ本より同し事あり然りと雖も此の區別有る事して古事記の謂ゆる天御中主神以下を結めて上件五柱神者別天神と

書されたるハ別天神の直の神の御在り坐す謂ある事傳三十三の注る如くあれは同し天神と申奉る中にも殊の上の上のれは今云ふ限の非ず右の如く打任せて天神と申奉るハ天照太神の渡りせ給ふと所思ひきハ彼瑞珠盟約章才一書ハ天孫と書れたるハ古事記ハ天神御子と作らんと其訓を同しと為べき由己の傳十六の注りき斯るハ其才一書ハ其を日神之子と有を天孫降臨章才一書猿田彦神の言ハ天照太神之子と天神之子とも申給へる是即天照太神を打任せて天神と申奉る可き確證也

百者あり斯る小其天神之子を又日神之子とも相通
 へして申奉れる状を以て思ふ小此天照大神をし
 天神と申奉るハ尋常小云ふ天上小御在一坐守神と
 云義小ハ非ずして日神と申奉る小同ト其ハ四神出
 生章小於是共生日神云ニ自當早速送于天而授以天上
 之事と有ハ更ふり神武天皇御紀戊午年小今我是日神子孫
 而向日征虜此逆天道也と見えたるふど日を天と云
 る例亦れハ此小天神と申奉るハ日神と称奉る小等
 しくして自餘ハ天神の例とハ同トらざる者小亦
 志有ける其ハ傳八九丁四十云り云り考合す可き者亦

此此小就て今思出たりけくハ伊勢風土記小神倭
盤盤余考天皇自彼西宮征其東洲之時云々逆勅詔天
日日別命曰國有天津之方宜乎其國即賜標劔天日別命
奉奉勅東入數百里云々と見えたる天津之方と云ふ津
事事例の處字の義小引合せて知べし若て日之方と
事本文小引の御紀小引合せて知べし若て日之方と
云云ハ東方と云事ある小其天日別命と云ふ天東別
命命と云事小東國を擡別て言向給ひし由と通り此
事事の説ハ已小傳三卷二十三丁十四卷十四丁云云
共共有り上上獻ハ才四一書小上奉於天と有る上奉を
 小共小官本小多麻麻都理何具と訓る其意を得て多
 小麻都理何宜給比伎と訓へきふり古事記ハ白上
 於天照太御神也と有る白上也ハ白而上理給比伎と
 訓へき所ある小其ハ上八十六丁小已八十丁小註るが如

く白の其八岐大蛇を討平させ御在り坐て其神劔を
得させ給へり一事の消息を奏聞元させ給へるを云
ひ上字の多氏麻都流と訓て其の上献タテマツルカふ當れる所あ
る是あり然る訓の例の其の九月十一日奉幣伊勢大
神宮幣儀小勅忌部参来忌部称唯升殿跪拍手四段先
執豐受宮幣云に授後執太神宮幣拍手自持復版每執
段手一訖勅中臣参来中臣称唯升殿跪侍勅好申天奉礼
中臣称唯復版と見えたる好申天ハ中臣の祝詞あり
奉礼ハ忌部の幣帛あり此を以て右の白上の其事が
このを白させ給へるも非ず又神劔のを唯小

奉らせ給ふ計小とい非る事を曉る可き者あり猶太
神宮四月神衣祭詞小和妙荒妙乃織乃神衣進事子
申給止申荒祭宮も如是申天進止宣祢宜内人又六月月
次祭十二月九月神嘗祭等詞小天照坐皇太神乃大前
尔申進准此天津祝詞乃太祝詞乎神主部物忌等諸閑食
止宣祢宜内人云ニ荒祭宮月讀宮も如是久申進止宣
神主部等共祢唯と有ふと皆右の状小異ふとざるあり但右の
共祢唯と有ふと皆右の状小異ふとざるあり但右の
の白上字ハ記傳小麻袁志阿宜多麻比伎と訓古事記
其下小少各毘古那神の寄来坐る所故尔白上於神
産巢日神祖命者云と有と同一趣の所ある小白上
の訓の替の事を如何と思ふに神劔を奉れるあり次
始あり右の如く事を申して奉り物非れ本より
あり唯事を申すのいふて奉り物非れ本より

其訓の異ふる可 借此を纂疏小進雄尊蓋以神劍奉日
き事論を待ず 神者其意欲傳之天孫而為白王之璽也注させ給へ
るハ実小其贖を探り得させ給へる御説小て愛た
と何とも云むハ中々小愚たる事共あり若て瀬河
止天淵記小乃上献と見えたる乃字ハ上一百八十粗
云るか如く其事を打置せ給はず一直小速小天神
の大御許小上献せ給へるふりる可らむ事ハ上
文小吾何敢私以安乎と有る文小照合せて凡知月
る事ふるを才四一書小素戔嗚尊曰此不可以吾私
用也乃遣五世孫天之菅根神上奉於天と見えたる五

世孫と云小驚きて其上天小捧奉らせ給ひける御事
を一也此大神の根国小入侍在坐むと為させ給へ
りハ實際と為る事ハ甚ニ祥ハ一りさる説あるカ
て若其如くふむ小其就べき国小も幸行ずりて
此国土小永く留まらせ御在坐る事の覺意見え難
く又此大神の国土小廣く厚き御功業を立させ御在
坐ける其較略をも見奉り知べりず一て甚ニ物
損ふひふる説ふ出来めると申す五世孫ハ菅根神
小下天小菅根神と申すハ其実ハ五世孫ハ誤ふる
渡しせ給へる由上百八十二丁の細書小粗云るを傳
二十二古事記小故取此大刀思異物而白上於天照大神也

山下學集草雜
劍條小昔天照太
神御牙素戔嗚
尊配出雲州時
持十握劍而割大
蛇尾之中有室劍
初此蛇帶劍時其
尾常有室氣故
曰天素戔嗚也
尊以此劍奉納
伊勢太神宮神曰
昔我所遺矢之劍
也と有て初より
皇太神の所持給

一と趣ありハ安事うと思ふ

とハ有れと其時速小奉給へるとハ因ハ記ハ有れと其時速小奉給へるとハ
神也と有れと其時速小奉給へるとハ
ハ乃遣五世孫天之菅根神と有る乃字を以て曉る可
字小等一き事を知べし云々乃字を以て曉る可
孫と云ふ一を立て自餘の直小獻給へる正ハ一き傳ハ
中々破れ強説あり若て天淵記小素戔嗚尊奉劍天照
太神太神曰我屏天岩屋時落此劍江州伊布貴山是我
神劍也と有て此時小皇太神の御物と詔給へる此大
御言ハハ素戔嗚大神の御使として参升せ給へ
り一五十猛命亦名天之菅根神の受賜ハり傳ハせ
たりつゝ心を史籍ハ漏て彼国人の口傳せる者と

見元たが実小其謂有る事とふじ所思ハりける
其ハ上ハ五十ハ師説ハ本著て委ハく書せるが如ハ其ハ彼
八岐大蛇の事ハ神社考小素戔嗚尊在出雲国斬八岐
蛇尾中有神劍所謂天村雲劍是也尊獻之于天照太神
太神云是入天岩戸時墮於近江国伊布貴山予惟日本
武尊所獲于蛇尾者也故八岐蛇靈為求其舊物而當于
尊之行道也是以言膳吹神八岐大蛇之所憂也又有て
其ハ岐大蛇と云けるハ氣吹雄命亦名霜速多美比
古命と云ける神の化れるあるを竹生島縁起ハ霜速
彦命生三兒氣吹雄命坂田姬命淺井姬命天降坐豐葦

日本書紀傳二十三

〇二百八

原水徳国と所見たる此事を大日本根子彦瓊尊^号
皇^璽天二十五年乙未と係たれども其竹生島の出来
始を云として其引れたり者^小て其^実神代の事
ありけむを其時^小に何れの時^小に有む皇太神の
伊布貴山^小に隕させ給へるを天上より奪去れるあり
ざりめども其山^小に天降^のの着てより彼神劍の主と有
て秘藏のけむを此素戔鳴尊の御為^小に斬り奉りけ
れ^ハ終^小に其神劍元の天照太神の大御許^小に復れ^ルる^ハ此^於て
り其大蛇を言向て国土人民を損傷る枉事無^レし^ハめ
神劍を得させ御在^レり坐て天照太神の神宝を復^レり奉

らせ給へる御功此^小に御在^レり坐せば皇太神の大御心
悦こばせ給へりけむ事右^小に是我神劍也と有る御言
小其餘韻^{ニホシ}飽まで見えさせ給へるを思ふ可^レし^ハ有
ける若て上^小に引る古事記^小に白上^小に於天照太御神也と
有る白上の言^ハ其^唯大蛇の^心の事を申させ給へるの
こを聞えさせ給ふ如^クふれども當昔然る荒振神の
類有て此国土の平穩ありさりける事を併せて奏
させ給へりけむ^ハ皇太神の大御命以て其志^小
給^小に根国^小に御在^レり坐む事を暫く留止め進^レりせ^レり
ざりむ^ハ小^ハに万^小に至^レり公ある御行状^小に渡^レりさせ給へる

△取天安河之向之
天堅石取天金山之
鐵而

此大神の御所為共小就て考ふ可りさる所有れば
決めて皇太神の大御許より懇到ある津返事を仰遣
はさせ給へりけむ御事申すも更ふりりし借此大神
然自由なる私御行ひ御在し坐ざりけり澄ハ常小
と云る如く上章才三書小諸神逐我今當永去如
何不与我好相見而擅自徑去歎云之則奉觀已先當隨
衆神之意自此永取根国矣と有ハ更ふり此小其一
劍を得させ給ひて是神劍也吾何敢私以安予と詔給
へり故其天照太神の是我神劍也と詔給へりし所以
ハ一已小傳十九百六十丁小云るが如く天照太神の天
石窟小刺隠りし御在し坐ける御時亦在て古事記云
求鍛冶天津麻羅而科伊斯許理度賣命令作鏡と見え

たは此小其天津麻羅命ハ一も鏡作神の相工と成
て專其御鏡を仕奉りれし事を書されたりども
其天堅石ハ一も謂ゆる眞石なり鏡ハ其鏡劍を被造
る料ふるを劍ハ天津麻羅命一神小て成り鏡ハ其二
神小直る事ふる故ハ右小令作鏡と有を其劍ハ一も
此より後小亡たりしハ自然小略りて傳ハハさ
る小ころ有けめ然ハ有れども古語拾遺ハハ正しく
令天目一箇神作雜刀及斧及鐵鐸古語佐と有て此雜
刀と云るハ大刀小刀又矛等を併せたる稱と聞ゆれ
ハ其此中小此草薙劍も在て此御時小出来りけむを

右の天津麻羅命天目一箇神ハ已小同神小御在し坐
す由傳十五二百七十七九十小注るが如く亦れば其
而説打合て違ふ可らず亦必有けるを此の宝鏡開
始章小掘天香山之五百箇真坂樹而上枝懸八坂瓊
之五百箇御統中枝懸八咫鏡下枝懸青和幣白和幣と
有を始として何れの傳小小劍を懸られたりと云ふ
事小無れども傳十九百六十一又小云る例を以推
す小決めて下枝小小劍を懸られたりつゝむを日神
を出し奉られし時小小專鏡を以て御問對の御事お
と御在し坐ければ此劍を除くとも無れども其方小

就て別小稱申さるゝおどの事し非りければ自然小
軽き方小成れる状ありし故小其混れ共小依て氣吹
山小ハ落されりけむを此小素戔鳴尊の武き御綾威
小依て得させ給へるを以て其大神の御勢さへ小相
加はりて妙小奇しく異しき神物と成れるるゝ其奉
りせ給へりし程より却つて彼招実ツキシよりハ上小立て
直小鏡劍と並ぶ次序とい成たりける物とこゝろハ想
像り奉るゝ御事ありけれ予が此神劍をしも此時
亦小可しと口を決めて云由ハ上世小此三種の宝物
を小神小奉るのふさず御世小の天皇尊考小
賢水小懸小て奉れる例此彼有ハ上古の礼式と見え
たる事小て其ハ景行天皇十二年御紀小神イ磯姫ガ

△此項の細書引よ
出雲神賀詞小就
て云事共をも
考合す可き者ふ
り

奉れるハ則拔祓津山賢木以上枝挂八握劍中枝挂八
尺鏡下杖挂八尺瓊と見え仲哀天皇八年并紀小八
縣主祖熊罴が奉れるハ豫拔取百枝賢木以立九尋
船之舳而上枝挂白銅鏡中枝挂十握劍下枝挂八尺瓊
と書伊觀縣主祖五十迹午が捧げたハ枝挂白銅鏡下
枝賢木立予舳之舳艦上枝挂八尺瓊中枝挂白銅鏡下
枝挂十握劍と見えたハ右の三種の神代ハ故事を取
れる者ふる事著きを何れハ三種の神代ハ故事を取
小も決めて劍を懸るれたハ事の有けむ皇大神の
磐戸を出させ給へる頃おひより落亡たるより其傳
物とこり思えたり故是よりして皇太神の大御許小
鏡瓊と共小御在坐て此劍を合せて謂ゆる三種神
宝小亦心渡りせ給へりける天孫降臨章才一書小
故天照太神乃賜天津彦火瓊杵尊八坂瓊曲玉及
八尺鏡草薙劍三種宝物と有る八坂瓊曲玉ハ天

津日繼の御璽ふり八尺鏡ハ天照太神の御璽小御在
坐一草薙劍ハ素戔嗚尊の御璽小御在坐る
を大殿祭詞小天津璽乃鏡劍子捧持賜天言寿宣志云
云と有り然るを其才二一書小是時天照太神手持宝
鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此宝鏡當猶視吾可
与同床共殿以為齋鏡と所見たハ其片御手小御取
り十坐一御鏡小就たる御祝言ハ傳られる小て其
片御手小御取り一坐て神劍小就たる御祝言ハ如何
して傳ハる者ふる事ハ状を思ふ小此小も視
此神劍當視吾与素戔嗚尊云ハ以為齋劍とどの如き

御言の御在り坐すてい得有べりぬ所あるをあむ
曉る可りりける拾遺ふも右と同一く鏡の御祝言の
ミを書せれども其下小至于砥城瑞垣朝漸畏神威同
殿不安云ニ更鑄鏡造劔と見えたり其始の同床共
殿の神勅ハ此二種小巨れり事決一此を以て右小云
るが如く神劔小就たる御祝言の脱たるを二書共小知べき
り若て上百六十小引る神宮の古傳ハ皇太神の此
時小三種神宝を事依り授奉りせ給へる御言小皇孫
如ハ尺瓊之勾以曲妙御宇且如白銅鏡以分明看行山
川海原乃提十握劔平天下と所見たるハ殊小其三種

神宝を寄奉りせ給へる御祝言なるが此を亦大殿祭
詞小試ハ皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御
座尔坐氏天津日嗣乎萬千秋乃長秋尔大八洲豊葦原
瑞穂之國乎安国止平氣所知食止言寄奉賜比と有る
安国止以上ハ右の分明看行山川海原と云ハ當りて
鏡小添たる御祝言なり次小平氣所知食止ハ下小應
ふ所有て右の平天下と有る劔小添たる御祝言ハ
るが其二を合せ給へるが故小錯雜れて別れずと
雖も其始小天津重乃鏡劔乎捧持賜天言壽宣と有
小照して右の御言ハ鏡劔小寄給へりける御祝言ハ

る可き御旨を明らめ奉る可き者あり
御事のミ御在り坐て玉の御事の見え
神宝と定めたる事あり其の傳八卷
記小日神の御事依の御事を以時伊
母由良迹取由良志而賜天照太御神
野知高天原矣事依而賜也故其御頸
之神と有る下小云るが如く此の長
小神と有る下小云るが如く此の長
了大孫命乃御詞小其意味の御言所
足良志御世御田永能御世止奉福
持齋波利持淨麻波利造仕有る此
五百御祈玉を以て稱申せ給へる
此の然る祈玉を以て稱申せ給へる
此の然る祈玉を以て稱申せ給へる

六月月次祭九月神嘗祭等詞小天津祝詞乃太祝詞と
依は授奉る給へる然り御心を容させ給ひて事
小是長親大神魯伎神魯美命宣久汝天穗比命賀詞を
能手長佐伎波神乃奉登仰賜志次乃隨爾供齋仕奉氏朝
日乃豐榮登白玉能乃相明御髮坐赤玉能阿加良毘坐
良久登奏白玉能乃相明御髮坐赤玉能阿加良毘坐
命能手長乃大乃行相明御髮坐赤玉能阿加良毘坐
大能鏡乃面乎意志日苗志天見行事能久知行年事能
志太末止云云と有る神の乃自安久平久知行年事能
国避の時小右の三種の神を最利と申せり大國主神の
て出雲國造の次ニ世の神を最利と申せり大國主神の
も云ふ然れは上何れを細書小も云ふ以て臣能礼自
例右の三種の中何れを細書小も云ふ以て臣能礼自
も廢れざる事著明き者あり傳二十二如く上代の
注るが如く上章才三一書ふる此素戔嗚大神の辭見

△奉る給へるを
天穗日命の

の御詞小且吾以清心所生兒等亦奉於妣と申させ給ひけるハ彼四神出生章才六一書小所見たる御父大神の御事依小次素戔鳴尊者可以治天下也と有が如く此天下国土の皆ハ一ハ此大神の御物なり然るを右小以清心所生兒等亦奉於妣と申させ給へる即其天下国土を奉於妣と云事小其を天照太神の御子として食国天下と天津日繼を事依一授賜へる御事を請奉らせ給へるあり故此小斯る神劍を得させ御在り坐てし打置おして直小天照太神の大神許小上献せ給へるハ一ハ私ハ御心御在り坐さる由

を見え奉らせ給ひ一ハ己尊の御靈として天神御子の同殿小御在り坐て守奉らせ給ひむとの御事小御在り坐けるも著く上小己小引る大殿祭詞小其初小天津璽乃鏡劍子捧持賜天言寿宣志と有て次小其劍小就たる御寿詞ハ安国止平氣所知食止言寄奉賜此と有て彼乃提十握劍平天下と見えたる是小當れとを其文小應へて以天津御量事問之磐根本根立知艸能可岐葉子言止天降利賜此志食国天下登天津日嗣所知食頂皇御孫之命云と有ハ即天下を以て安国と平らげて所知着す御事小御在り坐せハ素戔

鳴大神の此其意を寓こて此神劍をば天神小上獻りて其天神御子小授賜ふ可き由をば申させ給へりけむ御事推し知べき者ありり即天孫降臨章ある大已貴神の御言小乃以平国時所杖之廣予授二神曰吾以此矛卒有治功天孫若此以矛治國者必當平安矣と有し一事小て天神御子の武事を以て天下を平らげさせ給ひむ御事と申させ給へる小同卜致ふる御改小亦む御在り坐ける故其神代の事ハ姑く置て神武天皇戊午年御紀の次御言小不若退還示弱礼祭神祇背負日神之威隨影壓躡と詔給へる大御言の世小武

く雄く御在り坐す御事ハ申すも更ふる小御方よりも此を以て天壓神と名乗らせ給ひ御虜の方よりも然稱奉りて虜小ハ壓勝べき物と定めさせ給ひ君小ハ壓挫られ奉る物と天下の心互小疑ハナシて一ふるハ全く此神劍小寄て天照太神素戔嗚尊の大御綾威を預奉りせ給へる者小して其起源此小在る事小亦む有ける世の古学者と云る輩皇國の武國たる事を云り然れどむ何小して其武國ありけるぞ其然る所以を云ざらば此小天照太神素戔嗚尊の深き御幽契の御在心ちして謂ゆる香を隔てて痒を搔の譬小異ありざりけること速無けれ物皆依る所有り其因て起る所以を究めずし得む何〇然後ハ其神劍を天神小上獻さ

せ給ふ御使を上天小奉遣し給ひ畢て後を云ふり〇
 行覓ハ右小尋声覓往者ト有ハ等ト二字引合せて
 麻岐伊傳麻志氏ト訓べき由已小上二十六丁小云り然
 ハ有れども官本新宮本共小行を由伎都ト訓れバ
 猶本の任ふて有ふむとす即乍行の義ありハて其大
 蛇を鞆川上小て斬りせ給ひ其得給へる神劔を天上
 小奉りせ給ひ其地の御政を果させ御在り坐て鞆川
 上を出たせ給ひてハ小且ハ奇稻田姫命ト婚合為
 させ給ハハ宮地を覓めさせ給ふとておれハ由伎都
 二と訓て允小當れり万葉三卷十七丁小久方天傳來
自雪自物往來乍益及常世ト有

小往乍來乍を疊ミたる者
小して此の行乍の例あり 覓字ハ上ある一訓小母登
 米ト有り此ふるも母登年ト訓れハ母登米給比と訓
 添て下小續く可きふり万葉二三十八丁小秋山之黄葉子
 茂速流妹乎将求山道不知母六三十一丁海城孀玉求良之
 七八小湯種蒔荒木之小田兵求跡又十四丁古尔有監人
 之覓乍十六丁小春之去者妻子求跡鬻之木末子傳十二
十丁小緑児之為杜乳母者求云乳飲哉君之於毛求覽又
 梅毛老尔未鴨我背子之求流乳母尔行益物乎十三丁
 小沼各河之底奈流玉求而得之玉可毛拾而得之玉可
 毛又二十六丁奥浪来因白珠邊浪之縁流白珠求跡曾君之

不未益拾登曾公者不未坐又二十直不往此後巨勢道
柄石瀬蹈求曾吾未戀而為使伊奈見十四十三小宇惠古
奈宜可久古非牟等夜多祚物得米家武十七十四小佐
夜麻太乃乎治我其日尔母等米安波受家牟など有て
大抵上七二十小註る麻具と同トき物り其言ハ日
未グ小て眼前ハ物を引付て見ル意ハ母登牟ト云
時ハ本見ル引付レれて見ル義ハ麻具ハ未ノ義
有リ母登牟ハ往ル意ハ有テ少ク心用ヒ有ル事アリ
けり名義抄ハ小覓ル字ヲ母登牟ト美流ト有テ以テ
其言ハ小眼目ハ起ル事ヲ知ベ但麻具ト母登
牟トの言義ハ右ノ如クおれト其用ヒ○將婚ト之ト處
様等ハ然計ハ異リ無キ事アリ

私記ハ美阿巴ハ只西牟等ハ呂乎ト有リ即為身合之處
の義ハ古言ハあり已ハ傳七百十ハ註ル如ク八洲
起元章才ハ一書ハ見ル元ハ遂將合交ヲ私記ハ豆比
尔美安巴志世牟止ハ須ト有テ此ハ同トきハ此等ハ
所ヲ古事記国生段ハ如ク言竟而御合生子又御天降
段ハ此御子者御合高木神之女云ニ有テ續ハ紀才七
詔ハ伊波乃比賣命皇后止御相坐而有小據ハ訓ハ
たハ小依テ何時ト然訓ハ事ハ思ハ中ハ心
狭キ事ハ可ク美阿波志ハ云ハ次ハ云ハ講ハ合ハ事
小ハ古事記ハ美刀阿多波志都ト云ハ諸ハ有ル其ヲ

小幸之と首を
私記小女之津
又美ノ阿波波
之津と云訓首
ウ又具

此小ハ天孫降臨章第一書小幸之ミヤコ之字を訓る即与
身ミの義小ハ右小謂ゆる合交ミヤハスの語是あり故以語ハ男
女メ適合ミトウカヒの事ありと云ハ八洲起元章小思欲以吾身元
處合ミヤハス汝身之元處と有る即身合ミヤハスの語の因て生る可き
所トコロなり其事を承て直小於是陰陽始ミトウカヒ適合ミヤハス為夫婦メヲトと有
る其ミトウカヒ適合ミヤハスハ身ミ之熱アツク咋合ミヤハスある由已小傳六九丁小注
さハ如ハ其才ハ一書小ハ思欲以吾身陽元合ミヤハス汝身之
儀元ミヤハスと有て下小遂ツミ為夫婦メヲトと受たると亦右と同一事
あり此を以て見る時ハ夫婦交合する事を崇ホトまへて
ハ御合坐ミヤハスと云ひ常小ハ身合ミヤハスと云たりけむ事何ナニハ

疑を容る可き記傳五卷四三丁御合ミヤハスの下小美阿波世
のハ其御合ミヤハスの字の訓ハ古語ハをハ知ぬ僻事ハありと云れた
るハ此小婚字を身合ミヤハスと訓む事ハ非ハず○到出雲之
清地ハと有て下小清地ハ此云素鵲ハと見えたるハ唯清字
の訓注小ハ有ければ古事記小故是以其速須佐之男
命宮可造作之地求出雲国尔到坐須賀此二字以地と
有る小依て地字を登許呂と訓ハべき事云も更ハあり即
次小於彼処建宮ハと有る其記小謂ゆる須賀宮ハある事
下二百丁小委ハく云ハひハ如ハ右小宮可造作之地求
出雲国ハと有を記傳九三丁小宮字ハ作字ハ下小在る
意小見べハ宮ハ御宅ハあり諸此宮造ハ全櫛名田比賣

命小御合坐む料あり書紀小然後竟將婚之處と有る
即此の文小當を以知べし凡て上代小婚礼する小
ハ先屋を造りし事と見ゆ彼伊邪那岐伊邪那美大神
の御時小ハ先見立天之御柱見立八尋殿と有し御事
思合す可し出雲風土記小ハ神門郡八野郷郡家西北
三里二百一十步須佐能袁命御子八野若日女命坐之
尔時所造天下大穴持命將娶給為而令造屋給故云ハ
野と云りしと云れたる小然る言ふて即同記小大原郡
御室山郡家東北一十九里一百八十步神須佐乃牟命
御室令造給所宿故云御室と有し其並む小須賀山郡

家東北一十九里一百八十步有檜と有て其方位ハ本
より小て其里数まで打合れば決めて其清宮地是あり
可し猶古小婚礼する小屋を建て逢けし事ハ記傳四
十九十小万葉三四八十過勝鹿真間嬢子墓時山部宿禰赤
人作歌小古昔尔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋
立妻問為家武云ハ是ハ古賤者と雖ハ廬屋を立て妻
問すと云ふ習俗の有る故小如此續けて詠れしと見
ゆと云れ又其二三十九小吾妹子与二人吾宿之枕付婦
屋之内尔三六十十小吾妹子与左宿之妻屋尔と有る別
小建たる事ハ云ざれども夫婦隱寐る料小設たりし

△下二百三小引る
各義抄の同も其
字の訓の中は佐夜
と有ハ真屋と事
して其室ハ支婦共
寝を為す卧房ふ
るも思合す可

△夜霸餓枳菟
俱盧

物ある故小妻屋とハ云ふり又武烈天皇御紀影媛歌
小逗摩御暮屢鳴佐褒鳴須擬と詠るハ妻隱有小真廬
と云義以て地名の佐保小續けたり一者あり△万葉二十
丁小婦隱有屋上乃上山山乃十三丁小妻隱矢野神
山と有ハ妻隱有屋と云事小右小云る妻屋の例是
あり冠辞考小此ハ端の手小隱の箭と續くる意ある
詠る小ヤ諸鳴佐褒と冠してたハ小箭と云係たる
離居而と詠る卷二十小阿良之乎乃伊乎佐太波佐美
猶下二百六丁一丁廬造右小謂ゆる古事記の宮可造
之地ハ可建宮之地と云むが如く求出雲国と云ハ其

安藝国可愛之川上小降著き御在ハ坐其より鮫川
上ある鳥上之峯小到らせ給ひ其川上小於て彼大蛇
を事向させ御在ハ坐す以前小彼老夫婦二神暫若然
者汝當以女奉吾耶對曰隨勅奉矣と御有ハ如く其女
奇稲田姫命を后神と為させ給ふ可き御契約御在ハ
坐ハバ其位伊勢出雲国ハ内小て妻屋を建させ
給ふ所を尋覓幸行ハふり宮地を覓と云事の例ハ倭
姫命世記垂仁天皇二十五年條小于時倭姫命詔久南
山末見給波吉宮處可有見由詔天御宮處覓ハ大若子
命予遣支云々其處予宇太之大宗祢奈予为天荒州令

刈掃^天宮造令坐^支此處^波皇太神之欲給地^波不有悟
給^支其時大河自南道宮處^見幸行^尔美野^尔到給^天
宮處^覓佗賜^天其處^乎和北野^止辨^波云^三其時大若子
命從河御船^纜御向^支參相^支于時倭姬命大悅給^天大若
子問給^久吉宮處在哉白^久佐古^久志呂^宇遲之^五十鈴
川上^尔吉御宮處在白^支云^云と有^是是^是あり其二十六
年條^尔尔時倭姬命乃御夢^諭給^以我高天原^仁坐^魁戸
押張原如見見志麻伎志国宮處^波是處也鎮^理定^理給
止^覺給^支ともし所見^{たり}此^ハ神の御靈^実を供奉^りて
宮地を覓^むる^尔素戔嗚大神の御自其御在^一坐^口

可寺宮地を求させ給へる^は自佗の差^ハ有^けれ^ども
事^ハ一^尔故^小此^小舉^る者^{あり}無^仁天皇三年御紀
む^る所^小臣將往^處若^無天恩^聽臣情^願地^者臣親^歴視
諸国^則合^于臣心^欲被^給乃^聽之^云西^到但^馬国^則定
往^處と云^云○乃言曰の言^字を^以て^并登^阿直^志多
事^と有^り麻波^久と訓^り此^ハ已^小傳^ハ三^十三^年瑞^珠盟^約章
才^三一^書小^則称^之曰^正哉^吾勝^故因^名之^曰勝^速日^天
恐^穗耳^尊と有^小八^稱字^を用^ひし^れ此^才六^一書^小
大^己貴^神の御言^小遂^到出^雲国^興言^曰夫^葦原^中国^本
自^荒芒^至及^磐石^州本^威能^強暴^然吾^已摧^伏莫^不和^順
遂^因言^今理^此国^唯吾^一身^而已^其可^与吾^共理^天下^者

△傳十三百十八二
△才四一書小素
△素戔嗚尊云乃興
言曰才一書小
素戔嗚尊(興)称
之曰云くと見え又

△又古事記同前小為
言奉而治云々因言奉
是感也かど見え継体
天皇廿一年御紀小ハ
武德揚言曰と有り

△ふれハ素戔嗚天
神の御心清く
く成りせ給へる小
大意を得て
奉給へり御
言ありける者

者益有之乎と有て稱之と又典言の字を被用たり又景
行天皇四十年御紀日本武尊の御言云々と有亦進相模国欲
往上総望海高言曰是小海耳可立跳渡と有を熱田縁
起小も此文を載して高言猶云攀言と注せり△允言奉
と意小大得た日事有を意高高く攀て誇る状云
るを云ふあり万葉六卷二十六丁小千乃乃軍奈利友言
奉不為国然吾者事上為又十丁乃神在隨事奉不為
国雖然言奉叙吾為云々百重浪千重浪敷尔言上為吾
有小○吾心ハ古事記小吾未此地我御心須賀云斯
是有小依て吾御心の如く訓べり已十三引る出雲
風土記小安来郷云々神須佐乃鳥尊天壁立廻坐之尔

中宮本

△見え古事記水
垣宮殿小大物主
大神顯於御夢曰
是者我之御心と

時来坐此處而詔吾御心者安平成詔故云安来也と見
元又拜志郷云々所造天下大神命将平越八国為而幸
時此處樹林茂盛尔時詔吾御心之波夜志詔故云林と
也書一又秋鹿郡多太郷云々須佐能乎命御子衝杵等
乎而流苗比古命国巡行坐時至坐此處而詔吾御心照
明正真成云々△有か也何れハ御自称ある共小吾
御心と有る是あり風神祭詞小推神曾天下乃公民乃
作物乎不成傷神等波我御心曾悟奉礼字氣比賜支
と有る此ハ佗より申すふれバ猶更ふ如此く御字を
添て崇まへ申せ給へ事本ありあり○清二之ハ新宮本

小川之字を脱せり下小此今呼此地曰清と有て此小
 吾心清ニ之と言奉為させ給へり小起りて地名とい
 成れりかり借清字ハ上小清地此云素鶴と注され古
 事記小ハ正ト小到坐須賀此二字以音下俊之地而招之吾未
 此地我御心須賀須賀斯而其地作宮坐故其地者於今
 云須賀也と有る即右小當れ之言あり記傳九三十一小
 此言の意ハ濯スガクニ斯伎スシキあり濯スガクを濯スガクがスガクト云ハ騷
 トを騷モドがスガクト云ハ濯スガクを濯スガクがスガクト云ハ騷
 あり今此地小未坐つれば御心ちの洗濯スガクぎたる如く
 潔く所思え給ふ小今俗言小心の清スガクと云小同ト此

△播磨風土記撰
 保郡上園里條の
 品々天皇巡行之
 時關井此園水甚
 清寒於是勅曰
 由水清寒吾意
 宗我々心故曰
 宗我言と見え

ハ唯此時の御自所思す御心ちを云る小俗小云ハ
 心持あり採と云れたるハ然る言小猶源氏桐壺卷
 小須賀ニ賀ニとも得参らせ奉給ハぬありけり」と有るを
 始として其語多在るを記傳小其ハ滯無く速小事の
 行を云れば此ハ本より別と云れたれども允て
 物小穢濁ハ一き事ハ有る時ハ事ハの滯ニかされるを濯
 清まる時ハ速ニ通る者ハ有れば必同言同義あり
 と所見たり又記傳小此ハ俗小云ハ心持あり全体の
 き心性亡て清浄ニき善心ハ成給ふハ意ト為るハ要
 心法の善惡ハ就テ故此大神の本より清明ニ御心御
 云べき事ハあらず

在_一坐_才御事ハ傳十五ハナ二十二ニ三百ハ十ト委シく
説明_レめ奉_レれるが如_ク其一二を申_サバ瑞珠盟約章
ある誓約の御詞ハ如_ク吾所生是女者則可以為有濁心
若是男者則可以為有清心と申_サせ給_ヒけるハ果_シ
て男御子を生奉_レせ給_ヘりハ才_一一書ハ故素
彥鳴尊既得勝驗於是日神方知素彥鳴尊固無惡心と
也才_三一書ハ故日神方知素彥鳴尊元有赤心と見
えたる是日神の御方ハて也大神の清明き御心の
程を悉くハ所知看_サせ給_ヘるあり然_レて上章才_三
一書ハ於是素彥鳴尊白日神曰吾所以更昇来者衆神

處我以根国今當就_テ若不与_レ妙相見終不能忍離故矣
以清心復上_来耳今則奉觀已訖當隨衆神之意自此永
收根国矣清妙照臨天国自可平安且吾以清心所生兒
等亦奉_レ於_妙已而復還降_与有_ハ如_ク此御辞見の御
時ハて返_ニも其清心の御事を申_サせ給_ヘるを以て
也此ハ吾心清_ニ之と詔給_ヘる然_ル御心の善惡の
論ハハ預_レざる時ハて実_ハ記傳ハ云_レれたるが如_ク
其御時の御心持の御事ハハ有_ケる其ハ傳二十二
二百九上十三下云_レるが如_ク出雲風土記ハ意字郡安
十六下来_レ郷郡家東南二十七里一百八十步神須佐乃烏命天

壁立廻坐之尔時未坐此處而詔吾御心者安平成詔故
云安未と有、此才二一書小所見たる是時素戔鳴尊
下到於安藝國可愛之川上也と有る時の御事ふて其
此時天皇上ふて男御子をバ日神ふ奉りせ給ひて天
津日嗣と定奉りせ給ひ三女神をバ攀て御在り坐て
遙くと天路を翔巡りて天降り御在り坐て著せさせ
給へれば此ふ於て御心の安ん成りせさせ御在り坐
けるが故ふ右の御言原詔給ひりたりけり又此大
神の此處ふて吾心清く之の御言を奉らせ給へるハ
彼大蛇を斬せ事向させ御在り坐て国中ふ荒振る悪神を

滅びりて国中の巨害を断せさせ給ひ其尾中より得
させ給へり神劍ハ直ふ天照太神ふ奉りせ給
ひて其御治を仰奉らせ給へれば今ハ御心ふ係らせ
給ふ可き隈ハ御事の御在り坐さりければ実ふ
其御心持の洗濯ぎたる如く潔く所思えさせ給ひけ
る故ふ其御心の占を以て終ふ此清地ふ宮處を定め
させ給ふ御事ふ至らせ給へる者あるらり谷座
小吾心清く者一心清淨無一點之穢也と云れど此
ハ其淨不淨ふ抱ハ可き所ふらず其御心持を詔給
へるのミハ別ふる意有べりず記傳ふ又云く
抑前小己小御身の鬚爪ふど迄を抜て被給ひりど
も猶穢の盡竟ざり小や其後ハ大直都比賣神を
不意く殺し給ふ思行あり儲後ハ大蛇を斬て無上堂

劍を得て獻給へる此功類無さ小依て以往の穢ハ皆
盡竟たる故小今自御心ち清く爲りて所思せず
ある可く云れたれど此今呼此地曰清ハ古事記
小故其地者於今云須賀也と有る是ふり記傳九十四
小此地ハ出雲風土記を以て細小考ふる小先大原郡
須賀山郡家東北一十九里一百八十步有檜須我小川
源出須我山西流有年魚と見え又意宇郡野代川源
出郡家正南一十八里須賀山と有る此須賀山即
右の大原郡意宇を云ふ須我山ハ大原意宇二郡小亘
りて其堺小在り借同郡熊野山郡家正南一十八里
檀也河謂熊野と見ゆ斯れハ須我山熊野山ハ相並有檜
大神之社坐

る處ふれば熊野神宮が即此須賀宮處ある可き共ハ
郡家正南一十八里と有れば取と云れき然れど
も今俊信本を以て此を比校る右の野代川源を郡
家正南と有て熊野山を郡家正南と有る同トさ
れば行程ハ共小一十八里と有る合ふとて如何で
ハ同處ある事を得む今地圖を以て考ふ小須我山ハ
大原と意宇と二郡小亘れる地小て熊野山ハ其東小
隣れり若て須我小川を源出須我山西流と云れば須
我の地ハ其山の西小在る右の熊野神宮ハ東西小
隔れるが如きを同記小大原郡海潮郷郡家正東一十

六里卅三步古老傳曰云宇能治比古命恨御祖須我祢命而北方出雲海潮押上漂御祖之神此海潮至故云得鹽神龜三年即東北須我小川之湯淵村川中温泉改字海潮不用同川上毛間村川中温泉出不用地右須我山の西南と間ゆるが其須我祢命の名小因小其郷名の出来れり以前小其邊迄を係て須我の内あり一事知れたり然れが又記傳小同郡御室山郡家東北一十九里一百八十歩神須佐乃乎命御室令造給所宿故云御室と見ゆ此山と須我山と南方相並びて一十九里一百八十歩と有て相近き地亦れバ須賀

△小説て紫小其須室山と共須我山内ハ在れども其宮を造り給へり一地方が故其御室を以て山名と為るのこころ有れり等一其清地の内小一有れり下三指小云るか如くかて△事亦れバ云小足ざる者かろう心得有べし又万葉十卷平七丁情波由流布許等奈久須能夜麻須可奈久能未也孤悲和多利奈牟と有れ越中国小の歌亦れバ此須我山の事ハ非者ちがら又由有る事傳世の卷八十三下云ハ又因幡國須賀神の事在一坐す事ハ其百六丁小云

宮の事を如此傳へたるり又同郡不在神祇宮と有る十七所の中小須我社見ゆと意補云れたる其御室山あむ其須我社賀宮の在所小有べりる然るを通證素鵝社在大社与蛇山之間延喜式凡土記所謂出雲社者是而合祭素戔鳴尊稻田姬大己貴命三神と有れど其小合てハ古記の借才一書小素戔鳴尊云々乃於奇御戸為起而生兒辨湯清之湯山主三名狹漏彦八島篠一云清之繫名坂輕彦八島手神又云清之湯山主三名狹漏彦八島野と見えたるハ其須賀宮小御在一坐て令生給へる御児神あるが大国主神の八十神の爲小御又大神の御許亦幸行す迄の間ハ此宮小御在

△同川上毛河村川
中温泉出号

△箕原号清湯
山主者出雲清地
有温泉故為名
注させ給へる是
あり

坐ひむと所思ゆる由下百下下注るが如く若て其
清之湯山主ハ右ハ謂ゆる須我山の事あり湯ハ右ハ
引る海潮郷の下ハ即東北須我小川之湯淵村川中温
泉不用号有る是ハ温泉の下ハ不用号と云事の二
所ハ出たるハ唯ハ温泉と云事ハ湯山と云号ハ有
し所ハ小然る温泉の有を以て此を以て須賀宮ハ
後の熊野神宮の地とハ異ふる所あるを知べし或説
ハ湯淵村素戔鳴尊稲田姫命住跡有之と有れども然
る村里ありハ無く山坂ふどの地ありすてハ其御子
ハ清之湯山主とハ清之撃名坂とハ申す御名の有ハ

△て右の須我山と相
並びたる其南方の
山是あり

相叶ハざり者ありり又風土記ハ同郡佐世郷郡家
正東九里二百歩古老傳云須佐能袁命佐世木葉頭刺
而踊躍為時所刺佐世木葉墮地故云佐世と有し其海
潮郷ハ須我山ハ西方當りて遠りさる地ハ有ければ其
も此須賀宮ハ大神御在り坐ける程の御事と見えて此ハ
ても其宮ハ住著せさせ御在り坐ける證とハ成れる
者ざりり若て其海潮郷ハ今須我村と云ハ湯淵村の
須我社ハ海潮郷須我里ハ今在り神祇宮と云ハ
又須我山ハ同郷ハ在り保字奈塚山と云ハ須我山ハ
同郷飛石村ハ在り予未其地理を儲此下ハ因勅
知ざれば猶後ハ正し注す可きあり
之曰吾見宮首者即脚摩乳手摩乳也故賜号於二神曰

稻田宮主神と有小就て考有り其上百九十小粗云
るが如く大己貴神の生出させ御在一坐て隨分長成
らせさせ給ふ頃わひ至りて一大神は此須賀宮を
避給ひて已小外小物為させ給ひて其御成業を試
奉らせ給ひけ一右小引る風土記海潮御の下小宇
能治比古命恨御祖須我祢命而北方出雲海潮押上而
漂御祖之神と有小古事記小謂ゆる故此大國主神之
兄弟八十神坐一有一其中一神一御在一坐一坐一
其御祖之神と云一も同記一大穴年逢神一對一て御
祖命と書せる是一御須我祢命と申す須我一宮号一

り地名あり祢一姊一女一神一の謂一あり然る物一御
其宮を稻田宮と云一奇稲田姫命の御名を取れる一
れば此一御祖神と御子神等一共一此須賀宮一御
在一坐一け一る一若一其八十神一為一小辛苦一れさせ
給ひて御父大神の御許一至一坐一け一る一其一坂一給一臨一
以一遥望一呼一謂一大穴年逢神曰其汝所特一之生一大刃生弓
矢以而汝度兄弟者追伏坂之御尾亦追挽河之瀬意礼
為大國主神亦為宇都志國玉神而云一是一奴也故持其
大刃弓追挽其八十神之時每坂一御尾追伏每河瀬追
挽而始作國也一有一小令一せて風土記を考一る一小其大

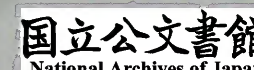
原郡神原御郡家正北九里古老傳云所造天下大神命
之御財積置給處則可謂神財鄉而今人猶稱之神原御
耳と有御父大神より授り給へる神財を收せ給
ふ地と云元凡る小又屋代御郡家正北九里古老傳云所造天下
大神之架立射處故云矢代神龜三年改字屋代即有正倉又屋裏
御郡家東北一十里一百六十步古老傳云所造天下大
令殖矢給處故云矢内神龜三年改字屋裏と有七生弓矢の事お
思合せりるを共小其間合遠りりせり處あり其
須我宮の本著て物為させ給へる小正八十神を伐給
小正御故此小御在坐を以ちり又城名樋山郡家正

北一里一百步所造天下大神大穴持命為伐八十神造
城故云城名樋山也と有須我賀宮より此小出坐て
御軍小及ませ給へるとして御城を造らせ給へるお
り又末次御郡家正南八里所造天下大神命詔八十神
者不置青垣山裏詔時追寤時此處追次坐故云末次と
有真城名樋山より此小攻至らせ給へる古傳あり
如此く大國主神の八十神を滅し給ふ小就たる故事
の皆此大原郡小在八全く其御祖命と二柱共小須賀
宮小御在坐ける小依れり者あり此を以て右の須
我根命祢小奇稻田姫命小渡らせ給へる可き由を知り又

△新宮本小宮三國久
理志多麻布と訓
△天孫降臨章小其地
有一人云事を其身
一書ハハ時彼外有
一神と作ら其地も彼
処と相通ハハ相書
例是あり

須賀宮ハ其大原郡ある須我山須我小川又須我社の
 御在一坐す海潮郷ある事を知れる者あり但其
 後小大國主命の住給へり其古事記小見元たり
 御父大神の御言小其我之女須世理毘賣為嫡妻而於
 宇迦山之本於底津石根宮柱布刀斯理於高天原
 冰掾多迦斯理而居是奴也有る宇迦山ハ凡土記
 小宇賀御郡家正北一十七里廿五歩所造天下大神命
 滾坐神魂命御子綾門日女命爾時女神不肯逃隱之時
 大神伺求給所是郷故云宇賀と有る其地あり然れハ
 八十神を減し給へり迄の宮所ハ須賀宮小て有るハ
 りけ ○於彼處建宮ハ古事記小其地作宮坐と有るハ因
 小て曾許尔那母宮ハ豆久理志美夜哀建給比祁流と訓調ハ可ハ
 此大神奇稻田姬命と御合坐其宮處を覓給ふと
 て幸行りけるハ御心の清ハハ思ハハ感けさせ御

在ハ坐一ハ其御處小住給ふ可きありけハと所思
 一定めさせ御在ハ坐て宮殿を作らせ給へるありけ
 り凡て神考の宮殿を造らせ御在ハ坐て留住せ給へ
 る例何れも其御心小得させ給ふ處有るを度ハハと為させ
 給ふ事ハて出雲風土記ハ秋鹿郡惠鞆御郡家東北九
 里卅歩須佐能乎命御子磐坂日子命國巡行坐時至坐
 此處而詔此處者國維美好國形如畫鞆哉吾之宮者是
 處造事者詔故云惠伴神龜三年と有る此ハ御心の
 事を云されども國維美好と愛給へるハ即御心の維
 やハ小美好ハ成らせ御在ハ坐す意を宣ひて其地



を宮處と定給へるあり次は多太御郡家正北五里一
百廿歩須佐能乎命御子衝杵等乎而留比古命国巡行
坐時至坐此處而詔告御心照明正真成者此處静將
坐詔而静坐故云多太と有し御心の照明アカ正真マダし
所思思感感世世給へるを度とて其處に留坐るオ
り右等は何れと現御身の御上の事ある人代と成て後小神の御靈カミの鎮守カミに給へるも
然有カミけり其は神功皇后御紀小皇后之船直指難波
于時皇后之船迴於海中以不能進更還勢古水門而下
之於是天照太神海之曰我之荒魂不可近皇后當居御
心廣田国即以山背根子之女葉山媛令祭略中亦事代主

尊海之曰祠吾于御心長田国則以葉山媛之弟長媛令
祭と有る此廣田長田ハ元より然る地名の有小就て
宣給へる小ハ有べりオず彼征韓の御政を守奉る也
給ひ終て御心の廣く長く成りせさせ給へる其處小
鎮坐むとハ託給へる者小て廣田長田の号ハ其御時
れる事此小素戔嗚大神の吾心清々之と御言舉為さ
せ給へる小起りて清地の称有り須賀宮の号有小等
しりぬ可くして此例猶多在しオを今其一二を挙
ぐ右等の御心廣田国御心長田国の例小依りバ御心
須賀国ハふじの言ハ有つしオを今物小書ハて傳ハ
しぬ小こり万葉一卷十八丁章ハ于吉野宮時歌ハ山川
之清河内跡御心乎吉野之国又十五卷十二丁小安我

已許呂安可志能字良尔と借此建宮の御事を古事記
有ふと右と同ト云様あり
少茲大神初作須賀宮之時と有て須賀宮の号有れ
此小も必清宮と書ふ所有べき小然らざるハ其記せ
る可き因て無き小依此の者ある可月又此下小稲田
宮主神の号有れ其後神の御名小因て稲田宮と云
称も必有つた心と所思しき由小然因勅之曰吾見
宮首者云々の事を古事記小ハ汝者任我宮之首と有
れハ本より大神の宮ある事申すも更ある所あり然
る小上百九下十小云曰が如く大神ハ其後小別處小移
り幸行中国土経営の御事を始させ御在り坐る後小

ハ其御祖奇稻田姬命其御子大己貴神と二柱住せさ
せ御在り坐ける故小此ハ右の如く吾見宮と有る
事ふれとも突小其始ハ大神の宮ある故小我宮と
ハ招給へるありけり偕其須賀宮ハ右二百二小引る
風土記小大原郡御室山郡家東北一十九里一百八十
歩神須佐乃乎命御室令造給所宿故云御室と有る是
小て奇稻田姬命と適合為させ給へる奇御戸ハモリドこり
ハ有けめ奇御戸ハ隱處モリドして又其の御室小異ふらず
其ハ古小男女隱寢る事ハ更ふも云ず唯小寢臥伏す小
も其室ありける事ハ古事記小大穴牟遲神の御又大

神の御所小出坐しける所小令寢其蛇室又入吳公与
蜂室と有ハ其神を宥かめ武給ふとして然る枉ハ
き処小入給へる小ハ有れども其室小令寢給へる意
ハ一あり次小八田間大室の事有る歟ハ其大神の御
自御寢坐む料あり神武天皇御紀虜小宴饗を賜ハ
所小作大室於忍坂邑と有し後小令卧給む料ハ
ゆる事ハ綏靖天皇御紀小會有手研耳命於片丘大室
中獨臥于大牀と有る其室小大牀を設けて卧給へる
小て推度されたり古事記神名小久ニ紀若室葛根神
見え顯宗天皇御紀小為室寿曰築立稚室葛根云々

有ハ屋を室を主として建る事彼二柱御祖神の八尋
殿小久美度を云ひ此須賀宮小奇御戸の御事御在

坐を以て准ハ一知る可き者あり天孫降臨章小
鹿葦津姫怨恨
乃作無戸室入居其内と有ハ産室右等ハ寢
室小異かゝらず又其居字を許母理と有をも思合す可
一萬葉二卷二十丁柿本朝臣人麻呂後石見国別妻上
来時歌小孀隱有屋上乃山乃と有を一云室上山と有
る室上も夜賀美と訓む所乃と有を一云室上山と有
夫婦隱寢る所ハ室乃と有を一云室上山と有
る者あり各義抄小室字を年呂とも須牟とも与流其
と登志也ハ加曾抑とも佐夜とも訓り其与流と云ハ
人の寢る事御与流と云ハ是ハ中務内侍日記小
御与流の後も急小寢れず云ハ増鏡小今日の日影
御覽門ハ何方小御与流と問ハ云ハ著閑集小月を
給小を云り又佐夜と云ハ訓有ハ上二百二十下小引
武烈天皇御紀影媛歌小逗摩御暮屢鳴佐寢鳴須擬

△新宮本小都流
と有て即

皇國書

清印

大正

南宮
大庫

と有る即妻隱有小真廬の義ある小
等しく真屋小て卧房を云祢あり ○建公古事記小
其地作宮坐とも作須賀宮とし所見たる作字小當れ
り八洲起元章才一書小作八尋之殿又化堅天柱と
有る化作を美多都と列るを以て多都と都久流と其
言別小して字ハ相一ふるを以辨ふ可し天孫降臨章
才一書小時皇孫因立宮殿是為遊息其才六一書小
其於秀起浪之上起八尋殿而云二垂仁天皇二十五年
御紀小故隨太神教其祠立於伊勢国因興齋宮於于五
十鈴川上是謂磯宮(倭)景行天皇十二年御紀小到豐前
国長峽縣興行宮而居云二即留于末田見色權興宮室

明治七年 七月十六日 菅次友

